

Title	倉沢愛子編著『都市下層の生活構造と移動ネットワーク』
Sub Title	
Author	小林, 和夫(Kobayashi, Kazuo)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2008
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.101, No.3 (2008. 10) ,p.581(185)- 585(189)
JaLC DOI	10.14991/001.20081001-0185
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20081001-0185">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20081001-0185</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



倉沢愛子編著

『都市下層の生活構造と移動ネットワーク』

明石書店，2007 年，355 頁

本書は、ジャカルタ（インドネシア）、東京・大阪（日本）、サン・クリストバル（メキシコ）という都市における下層社会の形成と生活構造を実証的に明らかにしたものである。

「まえがき」にあるように、本書は「都市下層の生活構造と移動ネットワークの国際比較研究」の成果として上梓された。本書が狙上にのせているのは、東南アジア、東アジア、ラテンアメリカという、地政的にも文化的にも背景の異なる都市群である。また、調査方法や、分析の対象としている時代区分も一定ではない。本書では、都市下層の形成と変容という問題意識をゆるやかに共有した筆者たちが、各自の問題関心にしたがって、それぞれの調査対象地にみる課題を論じるという構成になっている。

本書の章立てと執筆者は以下である。

まえがき（倉沢愛子）

第 1 章 『外来者の流入と都市下層の社会の変容—ジャカルタ南郊の集住地区の事例』（倉沢愛子）

第 2 章 『変容のなかのパサール（伝統的市場）—ジャカルタ南部 L 市場から』（内藤耕）

第 3 章 『都市下層の生活構造と社会的位置の変容—近現代の日本に於ける貧困の性格変化』（中川清）

第 4 章 『ひさぐ野宿者、もがく野宿者—地域隔離と意味世界』（青木秀男）

第 5 章 『離村インディオの流入と都市エスニシ

ティの変容』（清水透）

では、各章ごとにその概要をみていこう。

第 1 章の倉沢論文は、ジャカルタ市南郊に位置するレンテン・アグン町の集住地区の隣組 128 世帯を事例として、外来者の流入が既存の都市下層社会にいかなる変容をもたらしたのかを、質問票調査と聴き取り調査にもとづいて描写している。

筆者は、まず、植民地都市ジャカルタの変容と、調査地レンテン・アグンの歴史的背景を述べる。そして、スハルト開発体制の開始以降、周辺地域の開発と都市化によって 1970 年代から調査地に多くの外来者が流入しはじめ、1980 年代中ごろを境として外来者数が地元出身者数を上回っていたことを明らかにしている。

続いて、筆者は、地元出身者と外来者との対比に焦点をあてながら、出身地、居住年数、学歴、土地所有状況などの調査地住民の社会的プロフィールを分析している。筆者の分析から明らかになったことは、地元出身者と外来者の社会的プロフィールの鮮烈な対照である。筆者の分析によれば、地元出身者の特徴は、相続によってほぼ全員が持ち家を所有しているが、学歴は外来者よりも相対的に低く、年齢が高くなればなるほどその傾向が強い。また、職業としてはインフォーマルセクター従事者の割合が多い。これに対して、外来者の特徴は、持ち家を所有し、かなり学歴が高くホワイトカラー職に従事している者と、賃貸住宅に住み、学歴が低くインフォーマルセクターに従事する者との二極化の進行がみられた。128 世帯からなるひとつの隣組という小さな地域社会を、地元出身者と外来者という社会的変数から照射することによって、筆者は上述のような社会層の対照的な差異を浮き彫りにしている。

次に、筆者は、地域社会における外来者のリーダーシップを、隣組長、婦人会（PKK）役員、選挙管理委員などの隣組内の役職者と、経済的余裕があるとみなされている者たちの社会経済的背景から分析している。筆者の分析からは、これらの

地域社会のリーダー層が、地元出身者ではなく定着性の高い外来者に多い実態を垣間見ることができる。

最後に、筆者は、外来者 20 名の調査に対する「故郷との絆」についての分析を行い、外来者が親族ネットワークを頼って移住してきたこと、外来者はすでに「ジャカルタの人」として生活しているが、郷里が「心のふるさと」という心情をもっていることなどを明らかにしている。

コミュニティ研究は、インドネシア地域研究のなかでもひとつの大きな系譜をなしている。しかし、ある地域社会の変容を断続的に観察し続けた本章のような動態的研究はけっして多くない。インドネシアにおけるコミュニティの動態的研究は、リー・ジュリネックのジャカルタのクブン・カチャン (Kebun Kacang) のコミュニティ観察が有名だが、本章からは、ジュリネックの研究に続く希少なコミュニティ研究となる萌芽性を看取することができた。

第 2 章の内藤論文は、インドネシアの常設市場であるパサール (pasar) の今日的な姿を、第 1 章と同じくジャカルタのレンテン・アグン町を事例として、売り手と買い手に対する面接調査をふまえて詳細に報告している。

筆者は、まず、ジャカルタの公設パサールの特徴をあげている。筆者によれば、その特徴とは、公的管理下にある常設店部分に付随する路上市の存在、路上市がパサール空間にもたらす意外性、エスニックな多様性、パサールにみるジェンダー特性の 4 点である。

次に、筆者は、レンテン・アグン町のパサールの構造と性格の基本的な特徴をあげた後で、購買者の社会的属性、購買の目的、同パサールの商圈、購買行動の諸相を明らかにしている。調査地パサールの購買行動で目を引くのは、個人の消費目的よりも仕入れ目的の購買者の方が多いことである。このことは、パサールがたんにローカルな消費の場としてだけでなく、より広い市場 (しじょう) とも接続する重層的な場であることを示している。

続いて、筆者は、146 名のパサールの常設店店主 (一部は従業員も含む) に対しての聴き取り調査の成果をもとに、常設店商人たちの社会的属性と店舗状況をまとめている。筆者によれば、調査地パサールの店主の特徴は、男性がやや多く、民族的出自は一定の多様性をもっていること、多くはジャカルタに流入後に地元に住居していることなどである。また、店舗の特徴としては、食料品が中心であり、日常生活で不可欠の商品を供給していること、食料品を中心に比較的零細な店舗規模である一方で、毎日の売り上げが数百万ルピア以上に達する業者も複数存在することなどであった。さらに、筆者は、4 名の商人の事例から、彼らの社会的プロフィールの一端を提示している。

最後に、筆者は、管理事務所が把握する各種の数値と実態の乖離、パサールの駐車場で商うカキリマ (露天商) の参入、それを管理するプレマン (ちんぴら、やくざ) たちの存在などから、公的に管理しえないパサールの姿を描いたうえで、ポスト・スハルト期における「開発」のさらなる暴力の痕跡を浮かび上がらせようとしている。とくに、スハルト新秩序体制の維持のためにグラスルーツの場で精妙に動員されてきプレマンたちが、今日のパサールにおいても、「在地の権力」を発動する存在であり続けているという筆者の指摘は興味深い。

筆者は、近代的なショッピングモールの隆盛で、変容が著しいジャカルタにおけるパサールとそこで働く商人たちの今日的な実態を、綿密なフィールド調査によって生き活きと描いているが、とりわけ、ひとつのパサールを構成するほぼすべての商人に対して実施した聴き取りの成果は、資料的にもきわめて価値が高いといえる。また、結びで紹介されている市場の立て替えに反対する商人たちの組織化の動きは、パサールの変容が空間的な局面に限定されないものであることを物語っている。

第 3 章の中川論文は、明治時代以降の東京をおもな事例として、近現代日本における「貧困」概念の変容を論じている。本章はほかの章とは性格

が異なり、フィールド調査による成果ではなく、関連資料の博捜による分析がなされている。

筆者は、都市下層の概念変化を3つの時代—1880年代から1910年代、1920年代から1960年代、1970年代から1980年代以降—に区分して議論を進めている。筆者によれば、各時代にみる日本の都市下層の概念的特徴とは、順に「下層社会」「低所得者層」「多元化」であった。

各時代の特徴をみると「下層社会」の時代では、貧困層は外部の世界から踏査され、探訪されるきわめて異質な存在であった。彼らの存在は、「貧民窟」に代表される特定の地区に集住することで可視化されてもいた。また、社会関係は、過渡的とはいえ濃密な共同性に依存していた。この時代においては、彼らの存在は逸脱や社会病理としてとらえられており、いまだ「貧困」という概念では対象化されていなかった。

しかし「低所得者層」の時代になると、貧困層は社会階層の序列に位置づけられ、定型化がはかられる。そして、彼らは「下層社会」の時代における特定地区での集住から分散化し、都市社会の内部に組み込まれるものとしてとらえなおされていく。かつての可視化された存在から、不可視化された存在へと変わっていったのである。これにしたがって、社会関係も濃密な共同性が失われていく。そして、部分的な地域性の紐帯を残しつつも、家族を中心とする個別的な生活がみられるようになる。この時代に入ると、貧困層でも近代的な労働規律が受容されるようになり、彼らは経済という一般の社会と同質的な尺度で把握されるようになっていく。

「多元化」の時代にいたると、貧困層の概念上の定位はさらに大きく変化する。「低所得者層」の時代にも残存していた集住地区はほとんど消滅し、彼らの存在は点在化していく。そして、1980年代以降の非正規雇用の増大によって、特定の職業階層との関係性も希薄化していった。「多元化」の時代では「貧困」の視点が、所得や職業階層以外にも社会生活の困難さに向けられるようになる。

なぜなら「低所得者層」では、たんに経済的貧困には還元できない、単身の高齢者世帯・障害者世帯・ホームレス・外国人労働者のような、社会生活の困難を抱える人びとが顕在化してきたからである。

筆者は、上述のような3つの概念のあらましを提示したあとで、それぞれの時代における「貧困」の内実をさらに詳細に分析し、近現代の日本における「貧困」が社会構築主義的に意味づけられてきたことを丹念に論証している。

筆者は、最後に、「貧困」の多元化と近年の激しい生活変動との関係性を指摘している。昨今、生活格差をめぐる議論が盛んであるが、筆者のこの指摘は、激しい生活変動のただなかに生きる私たちすべてが、多元化が進行する「貧困」とまったく無関係ではないことを示唆するものである。

第4章の青木論文は、経済のグローバル化によって「新しい野宿者」が世界の諸都市にみられるようになった変化を問題関心として基底に置きながら、日本の野宿者の全体像、野宿生活前後の職業、野宿者の意味世界を分析している。

筆者によれば、日本の野宿者の基本的属性とは、中高年齢の元建設土工の単身男性である。また、その数も諸外国と比較するとけっして多くない。この基本的属性に代表される日本の野宿者たちは、筆者の指摘のように、日本の経済・社会構造によって生み出されているのである。

次に筆者は、大阪で実施した1999年の調査結果から、人びとが野宿者となる過程と、野宿生活から脱出できない理由を彼らの職業に焦点をあてて分析する。それによると、野宿者になる人びとは、同時期の国勢調査との比較からも明らかなように、低位な家族背景による低学歴の者が圧倒的に多い。このため、彼らの職業の選択肢は、初職、最長職、直前職のいずれもきわめて限定的となり、加齢にともない必然的に社会的な地位下降という過程をたどる構造になっている。

続いて、筆者は野宿者が野宿生活から脱出できない地位隔離の背景を、やはり職業に焦点をあて

て分析している。それによると、多くの野宿者の現在職は再生資源回収に代表される最低賃金の雑業である。野宿生活の脱出のために転職を希望する者は多いが、転職は容易ではない。とくに、正規就労にいたっては、経済的・社会的な原因から野宿者に適当なものは皆無に近い。転職のための求職活動の門戸ははじめから制限されているのである。それゆえ、野宿者たちは転職を諦め現在職にとどまる。現在職にとどまることは、野宿生活の続行を意味する。これが筆者の示す野宿者の地位隔離の実態である。

最後に、筆者は野宿者たちが置かれている境遇の意味世界を考察している。筆者によれば、彼らの野宿生活における意味世界とはけっして一面的なものではない。それは「生のひさぎ」と「生のもがき」という両義的な世界である。筆者は、野宿者が「生のもがき」のために駆使する戦略を「街頭出し抜き戦略」とよび、これを4つの様相—仕事の要領、食料の調達、住居の確保、暮らしの便宜から論じている。これらの様相からみえてくるのは、野宿生活の過酷さに由来する戦略の多様性である。野宿者の生とは一様ではない。彼らは、困難な生活のなかで「ストリート・ワイズ」を創出し必死に「生をもがく」。そこには、野宿者たちの多様な生のかたちがあるのである。

結びに、筆者は、野宿者たちが社会運動に参加しはじめたことを述べ、野宿者のもがきから抵抗へと架橋する論理の探求を今後の課題としてあげている。野宿者たちの実態をさらに可視化させる社会運動とそのポリティクスがいかなる結果をもたらすのか、筆者の課題へのこころみをしばらく注視していきたい。

第5章の清水論文は、チアパス高地のインディオ村落に住むインディオの大量の移住によって、サン・クリストバル市の都市エスニシティに変容をもたらされた事例を、インディオ集落であるチャムーラ村での長年のフィールド調査の成果から論じている。

はじめに、筆者は、チアパス高地におけるイン

ディオ社会が1970年代以降に大きく流動化した4つの要因—人口増加、労働の多様化と階層分化、新エリート層の台頭、プロテスタントの拡大と追放—について論じている。これらの要因によって、周辺のサン・クリストバルにインディオ村落を離村した大量のインディオたちが流入することになる。このうち、筆者が最後にあげているプロテスタントの拡大と追放では、都市への移住が、経済的な問題以外に、社会的・文化的な問題によっても誘引されることを示している。

次に、筆者は、インディオたちの急激な流入によって、サン・クリストバルにコロニーの拡大と人種構成の変化をもたらされ、かつてのコロニアル・フロンティアが崩壊したことをあとづけている。

続いて、筆者は、インディオたちが建設したコロニーが、サン・クリストバルの都市空間にインディオ性を形成していく前段階の諸相を論じている。筆者によれば、インディオたちが建設したコロニーとは、たんに宗教や言語に収斂しない多元的・流動的な空間であり、異質性を共存させるものであった。

最後に、筆者は、インディオたちが流入後に再編してきたアイデンティティー「都市インディオ性」—を基礎として、サン・クリストバルに新たなフロンティアが形成された背景を論じている。新たな都市フロンティアは、インディオたちの生活基盤の確立、組織化による経済フロンティアの拡大、政治主体化と政治進出によってささえられてきた。インディオたちのコロニーにおける異質性を共存させるエートスや、多元的・流動的空間がうみだす共同性は、彼らの急速な経済発展と民族的紐帯によって、新たな都市フロンティアを開拓していったのである。

サン・クリストバルに流入したインディオは、1995年には全市の人口のおよそ30%を占めるにいたる。彼らのコロニーは、街中と同じような学校や教会が立ち並び、整備された住宅地へと姿を大きくかえた。こうして、サン・クリストバルでは、1970年代以降のインディオたちの急激な流

入から四半世紀の時を経て、大きな変容がもたらされたのである。この大きな変容は、同時に、移住元のインディオ村落では看取できない都市インディオたちの新たなエスニシティをうみだした。

筆者は、結びのほうで、都市インディオたちのあいだの経済格差と階層分化を指摘している。サン・クリストバルを大きく変容させ、また、みずからもエスニシティを変容させた都市インディオたちが、経済格差と階層分化のなかで、次代にはいかなる共同性や民族的紐帯を顕現させるのだろうか。たいへん興味をひく点である。

以上、本書では、都市下層の形成と変容という問題意識を基層として、さまざまな問題が検討されている。読者は、本書で示されたフィールドワークの成果と資料の博搜による知見を吟味していくことで、一瞥すると独立しているかのように思える各章が、最終的には全体としてひとつの像を結び、本書が設定した主題に収斂していくことに気づくはずである。とりわけ、第2章の内藤論文で示された商人たちの組織化、第4章の青木論文で

示された野宿者たちの社会運動、第5章の清水論文で示された都市インディオたちの政治進出は、地政的にも文化的にも背景の異なる都市における新たな社会運動の展開という共通の論題が設定できよう。

本書で、ひとつ気になったのは、紙幅の問題からか、都市社会の変容にきわめて大きな影響を与えているグローバリゼーションが、各章であつまっているナショナル、または、ローカルな変容とどのように連鎖しているのかという点が、具体的に言及されていないことである。むろん、だからといって、各章の「分厚い記述」にもとづく多くの知見の価値を減じるものではない。グローバリゼーションと、各国の都市におけるナショナルおよびローカルな変容との関係については、筆者たちの別論を待ちたい。

小林 和夫

(日本大学文理学部非常勤講師)